

修士論文概要

生活改善アプローチがもたらした変化の考察 ーエクアドルチンボラソ県のインディヘナグループの事例から

学籍番号：22MD0228

横田 裕子

研究の目的と方法

本研究の目的は、エクアドルのインディヘナコミュニティで実施された生活改善アプローチを取り入れたプロジェクトについて、実施側 NGO がどのように現地の実情に適応させ、その取組みがどのような変化をもたらしたのかを明らかにすることである。

生活改善アプローチは、戦後日本の農村民主化の基盤となり農村部の生活水準を大きく改善した生活改善事業の役割を、国際協力機構（JICA）が検証し、その経験から生まれた開発手法、生活改善普及事業は、農家の家庭生活を改善向上することとあわせて農業生産の確保、農業経営の改善、農家婦人の地位の向上、農村民主化に寄与することを目的とした事業である。戦後の日本の農村開発経験を開発途上国の開発プロジェクトへ応用する試みは、生活改善アプローチとしてアフリカや中南米各国で援助プロジェクト等として実践され、その効果も示されている。他方で、事業開始に当たっての導入アプローチ（ワークショップ）や生活技術の指導は似たような内容であるが、どのようにローカライズし、生活環境の改善や住民の態度の変容が見られるまでにどのような変化が観察されたのかは報告書等では詳しく述べられていない。本研究では、調査対象のコミュニティのグループにおいて、生活改善アプローチが実施される以前の家庭やグループが、生活改善アプローチの導入によってどのように変化したのか、実施側の NGO にはどのような変化があったのかを分析することで、生活改善アプローチがもたらした変化を考察した。

研究方法は、まず先行研究から、日本の生活改善の経験について、時代背景や環境、実施機関の関係性、実際の取組みなどを整理した。続いて、開発途上国援助において生活改善アプローチを取り入れた事例を報告書等から調査し、生活改善アプローチを取り入れた背景と経緯、導入と実践の状況について考察した。先行研究と文献調査から得られた開発途上国における農村開発援助において日本の生活改善の経験をどう適応させていくことが出来るのかの要因に注目して、事例として取り上げたエクアドルインディヘナコミュニティでの生活改善の取組みについて、活動に帯同しインタビューや参与観察を通じて得られた情報をもとに分析した。

論文の構成

第1章 研究の背景と目的

第1節 研究の背景

第2節 問題の所在

第3節 研究の目的

第4節 研究方法

第5節 論文の構成

第2章 生活改善の概

第1節 日本の経験

第1項 戦前の生活改善

第2項 戦後の生活改善

第2節 開発途上国への実践事例

第1項 JICA 事業における生活改善アプローチの適用の経緯

第2項 グアテマラの事例

第3章 生活改善の研

第1節 日本における生活改善の研究

第1項 生活改善普及事業の発足経緯と整備、導入過程の研究

第2項 地方における生活改善普及事業の実施実態の研究

第3項 開発援助における適用可能性の研究

第2節 開発途上国における生活改善アプローチの研究

第1項 開発援助の分野での生活改善研究の経緯

第2項 生活改善アプローチの中南米での展開についての研究

第3項 パラグアイでの実践事例の研究

第3節 先行研究からの考察

第4章 エクアドル社会と先住民女性

第1節 エクアドルの概要

第2節 エクアドルにおける先住民運動

第3節 エクアドル農村コミュニティにおける女性の状況

第4節 小括

第5章 エクアドル農村コミュニティ生活改善グループの活動

第1節 取組みの背景と実施までの流れ

第2節 生活改善アプローチの実践ーインタビュー・聞き取り調査から

第1項 コミュニティとグループの概要

第2項 取組みの流れ

第3項 取組みの実態

第3節 協力団体の生活改善グループへの関わり

第1項 協力団体マシュカナ財団の概要

第2項 生活改善グループへの活動支援

第4節 小括

第6章 生活改善アプローチの導入と実践による変化

第1節 NG

第1項 プロジェクトの設計と実施方法

第2項 活動開始後の課題と対応

第3項 実践状況の分

第4項 観察された変化

第2節 グループ

第1項 活動開始後の課題と対応

第2項 実践状況の分析

第3項 グループ活動の分析

第4項 観察された変化

第3節 考察

第7章 結論と今後の課題

第1節 全体考察

第1項 生活改善アプローチがもたらした変化－プロジェクト活動

第2項 生活改善アプローチがもたらした変化－現場での経験から

第2節 結論

第3節 今後の課題

論文の概要

第1章では、研究背景と問題の所在、研究の目的と方法について、研究全体の概要を述べ、第2章では、生活改善について、日本の経験の概要を先行研究から当時の社会状況の背景と合わせて説明し、開発途上国への適用について、生活改善運動の研究を受けた事業への適用の経緯と技術協力プロジェクト等により開発途上国で実施された事例について報告書類をもとに紹介した。第3章では、日本の生活改善普及事業の研究と生活改善アプローチとして開発途上国での開発援助として取り組んだ事例の研究、これら先行研究で得られた示唆から、生活改善アプローチの導入における重要事項について考察した。事例分析のため、日本の生活改善の概要と研究、途上国での実践例とその研究から、開発途上国において生活改善アプローチを適用する場合に重要である点を整理した。

第4章では、参考文献からエクアドルの先住民と組織化、先住民コミュニティの女性が

おかれた状況について説明し、第5章では、事例として、南米エクアドルのアンデス高地に位置するチンボラソ県グアモテ郡で NGO が協力団体と共にインディヘナコミュニティで実施した生活改善アプローチのパイロットプロジェクトを取り上げた。NGO の事業と生活改善アプローチの親和性からパイロットプロジェクトを実施することになり、協力団体と連携しながら試行されていた。

第6章ではインタビューと参与観察を通じた分析とその考察を行った。地域の実情に応じた導入方法については次のように分析した。本プロジェクトでは、新たにグループを形成せず、生活改善というテーマに見合う適当なグループを NGO の活動地の中から選び、インディヘナコミュニティの文化や生活習慣を熟知するスタッフが中心となり、個別の家庭訪問による事前説明を行うことで夫や家族の理解を促し、会議や研修への夫の参加へと繋がった。加えてパイロットプロジェクトであったからゆえ、予算や時間の制約がなく、活動開始後も時間をかけて進めることが出来た。それは、物事の決定に時間をかけるインディヘナの慣習にも合っていた。生活改善アプローチがもたらした変化について NGO とグループについて以下のように分析考察した。NGO は、既存事業とは対照的に、取り組む活動を生活の中から決め教育的手法を徹底し、実践の中で改善の主体がメンバーであることを理解し意思決定をサポートしていく姿勢が見られるようになった。対象グループとそのメンバーに対しては、生活改善アプローチは生活における物理的な変化と、個人やグループとしての態度の変化をもたらししていた。改良かまどや台所の水道設置といった台所改善により、家事労働の負担軽減と家と料理を温かい状態にでき家族も満足していた。活動が停滞した時、NGO と協力団体は繰り返し生活を改善する主体はメンバーであることを伝え、徐々にグループ内で意見が言えるようになり、グループとして活動を決めて実行し、問題もグループで話し合っ て NGO や協力団体の支援を受けながら解決していくという態度の変化、さらにはグループ活動が他の家庭に影響を与えつつあることが見えてきた。

第7章では、全体の考察と今後の課題について述べた。第6章で述べた変化をもたらし た要因は、実施側の支援活動の在り方とエクアドルのインディヘナコミュニティにおける社会背景にあると考察した。生活改善は、『「生産」と「生活」は車の両輪である』という考え方が特徴のひとつであるが、2008 年のエクアドルの憲法改正時に取り入れられたインディヘナ概念である Smak Kawsay（スマク・カウサイ）の「相互に関係し依存し合っている」という点とも共通する部分があり、先住民の世界観に、生活改善アプローチのコンセプトは呼応するものだったといえる。グループが生活改善アプローチを受け入れ実践していった背景には、コミュニティの女性は体力・精神的に厳しい生活を強いられてきて、生活を改善したい潜在的な希望を持っていたこと、グループとして貯蓄や農業生産の向上をさせたい気持ちがあった。それらを理解して NGO が生活改善アプローチを実践していったことで双方が具体的な変化や効果を経験していた。